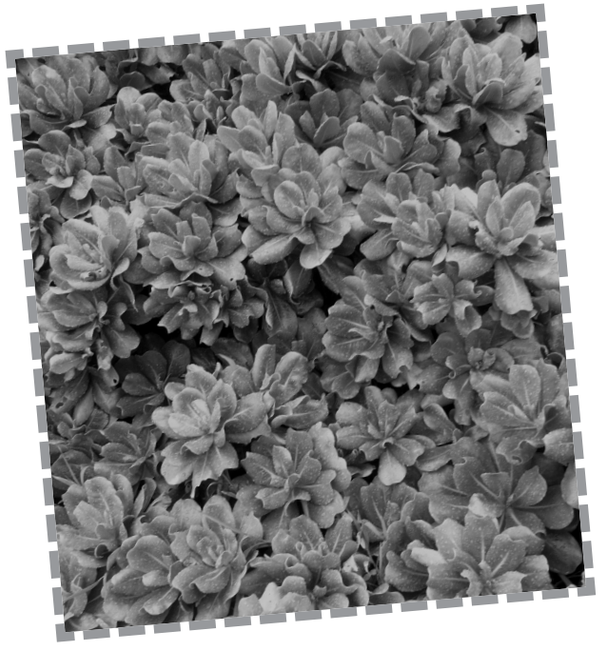
月　刊

Mélange

Vol.132



2018.04.22

詩と評論

月刊「Mélange」 Vol.132 2018.04.22 「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」132 号　目次

詩・俳句

偶感……野口 裕　03
座り方詠（俳句）……岩脇リーベル豊美　04
洗濯物 ……中嶋康雄　05
あの人が緑と言うとき……月村 香　06
みじんも ……大橋愛由等　07
し月 ……安西佐有理　10
小さな画家／トランジット／むかわり ……高谷和幸　11
観測地点　（ 藤野翔真くんへ）……大西隆志　12
てる　み　……中堂けいこ　13
三つの影切り ……高木敏克　14
いや　暗いなあ ……木澤 豊　15

読書会資料

フランツ・カフカ「ある流刑地の話」の考察……高木敏克　08

連載／エッセイ

神戸詞（うた）あしび 121「仏教とキリスト教を巡って考えたことなど」……大橋愛由等　16

表紙の写真は、奄美の海岸で撮影したもの（撮影・大橋愛由等）

編集部だより★51／神戸日西協会が創立 40 周年を迎えた記念に開催されたクラシックギターの演奏（鈴木一郎氏）と詩の朗読（竹下景子氏）コンサートに顔を出した（4 月 21 日）。取り上げられた詩人は三人。スペインのガルシア・ロルカ、日本の谷川俊太郎、金子みすゞ。竹下景子氏は女優であり、詩の朗読も手慣れたものである。会場の松方ホール（神戸市中央区）は満席ではなかったものの、詩の朗読会としてはよくお客さんが入っていたと思う。竹下氏の朗読は、詩人たちの自作詩朗読と異なり、抑揚と声色の変化によって台詞を読むような読みかたであった。選ばれたロルカの詩は、永年「ロルカ詩祭」を重ねてその詩祭で朗読されてきた作品と異なるもので、同じ作家の作品かと驚いたほどであった。ギターについて、わたしは日頃フラメンコギターの演奏を聞き慣れている。舞台の上で、時にかき鳴らすように情熱的にかなでる奏法と大きく異なっていて、クラシックギターの演奏は静謐な音空間が展開されていた。外国では詩の朗読会が盛んに開催されていることを考えると、こうした朗読会も多様にあっていいのだと思っている。（大橋愛由等記）

◆偶感

野口 裕

金網はまだ被覆の色を保っている
ところどころに金錆の紅い筋が走っているが
遠くからぼんやり見れば十分に水色だ
さらにその向こうを望めば一冬越した枯草が続く

枯草は今
春の日射しを浴びて空地の中央に白く光る
元気者の鵯が側の薮椿をつついても
椿が落ちてきたなら受け止めてやるよ
くらいの親切心があるにはあるが
もう何が起きても無関係だよと
まなざしは枯れきった茎の中央の
芯へ芯へとそそがれる
少々の風では揺るがない固く枯れきった芯

この眺めは何度目のデジャブだろうか
五、十、十三、十五、十七、十九…
ああ数え切れない

ことあるごとに訪れたデジャブが
まなざしに助けられて
真っ黒にフェードアウトしてゆく
日射しのあたたかさを感じつつ

老残のこと伝はらず業平忌（能村 登四郎）

◆座り方詠

岩脇リーベル豊美

体育の座り方で命の遣い方を水平思考する
啼き方の講義へ孤児村行きバスに乗り
夕月や暗殺察す放物線の描き方
カルニヴァル仮装ではなく武装す魔女
モハメドとムスタファ千夜一夜語り方
きみを見たユーチューブ砂漠に篝火
朗読結句あはぁっ。と喝采湧き出づる国
新月詩予感のノート抱きながら眠る
政宗ともう一人男子に愛され方の夢
ついに釣る虹鱒や熱狂の復活祭
復活節亡き妻の鞄でお呼ばれ老教授
若菜畑に兎の恋が喚起す変な気持ち
石段の真ん中駆け昇る異国風
言葉の蒼色を聞く音楽の翻訳

◆洗濯物

中嶋康雄

友だちは洗濯物だった
ほされて風に揺れていた
クスクス笑いながら
一緒に揺れていた
「もう乾いたね」
母の声が聞こえると
洗濯物はどこかに連れて行かれた
次の日も
洗濯物と一緒に揺れた
雨の日には友だちはよそで遊んだ
風の強い日には友だちは乱暴だった
約束はどこかへ落っことした
壁を食べていると

洗濯物が優しく頭を撫でてくれた
雲を眺めながら
洗濯機の悪口を言い合った
母の悪口を言い合った
ぐるぐるぐると何もかもがまわっていた
洗濯物の最後の湿り気を渡してくれた
喉の渇きは癒えなかった
そして友だちは去って行った
ベランダの床に穴が開いていた
暗い穴だった
ひとりぼっちだと
穴に吸い込まれそうだった
洗濯物をいつまでも待っていた
待っている自分は
随分前からいないことになっていた
誰も捜してくれなかった
友だちは洗濯物だった

◆あの人が緑と言うとき

月村香

三つ葉たちのように
わたしは悲しかった
髪々の群像のかおり
肉体から剥がれた紅
自分をいたわれずに
百の音に耳は泣いた
酒のしみ込むリング
木製の遊びの七割引
で買ったんじゃない
放っといてよと酒を
飲む前に言ったのだ
木は堅いからやはり
胸に下げるとしよう
さまざまな蛍光色と
独特のカット木製の
それらは緑色の岡を
見ているのであろう
きっときのう見た画
のようにゆれる花の
足もとにうずもれる
木をちょっちょっと
削った片でつくった
リングらはちょうど
四つあるから家族に
ひとつずつ今は心が
こもってはなくても
そのうちにこもるわ
わたし知ってるから
みんなはばらばらに
なるのこれからみな
違う場所で暮らすわ
わたし悲しいとても
悲しいわよこの世に
ボン・フォワイエが
なくなるの何もかも
ゼロから始めるのね
この歳にてわたしは
わたしを氷上の詩人
たる詩篇をもたない
なんの躊躇もなくて
緑が吹きはしまいか

◆みじんも

大橋愛由等

逆巻きの青虫が背理を食べようとして
（禁水に近づいていく蝸牛に近づいていく私の
情理。黒に染まるか辺縁に色づけされるのか
ロスに問いただしてみようとしてふと目にした詩だまりに困惑を
投げつけようと左腕を大きくふりかざすとその仕草に感応したイ
カロスは言った「バスタブに湯をためている時に焚書から匂いた
つものを記述しちゃだめだ」。ゆらゆらゆらめく鏡を修繕するた
めに女装した少女に鏡の再設定の方法を聴いてみると「そのアイ
コンは一九世紀的なエピステーメーに浸っているから」と紙風船
を膨らませてキャデラックに乗って去っていく。聴衆のいない円
形劇場でクセノファネスが存在の四元素についてひとり語りを始
めようとしている時にくしゃみがとまらなくなりアルケーを丸め
てプネウマのごとく転がしていけばやがて詩だまりに到着するの
だという信心が河原の石のように転がっている。トロツキストが
怒りを向けている相手は群れからはずれて渡海をかさねるサシバ
でありいくら声をかけ語りかけても返ってくるのは「ジジ」だけ
なので苛立ちは日々ますばかりで詩だまりのなかからとっておき
の詠嘆をサシバに捧げたいということを伝えられずにいる。蛇は
振り返りざま哀しい目つきをして南方にむけて舌をちょろちょろ
差し出しているのは充分覚知しているのだがせまりくる私の情理
に怯えているのか乾き始めた皮膚に潤いを求めてそこへ向かわざ
るをえないことと丸呑みしてまだ消化しきれていない仮面がうる
さくしゃべりつづけているということと。

▼第132回読書会発表資料

フランツ・カフカ「ある流刑地の話」の考察

高木敏克

離島の処刑場にやって来た旅人は死刑を執行しようとする将校に尋ねた。
「この男は処刑されることを知っているのですか？」
将校は傲慢に次のように返答した。
「知らせても仕方がないでしょう。自分の身体に書いてあればわかることです」
不審そうに見返す旅人に、将校は次のように付け加えた。
「つまり、上官に服従すべしと身体に彫り込むのです」
どういうことなのか、不安そうな旅人に、込み入った説明がなされた。
「あの図案箱の中に歯車があって耙の運動を司っています。この歯車は判決の言葉に応じて調節されるのです。わたしは現在も前の閣下のことばを使用しています」
それは十二時間かけて判決を犯人に刻みつけるということだった。目で見て文字の意味を解くのは容易ではない。（中略）男は自分の傷で謎を解くのです。かつては民衆の圧倒的な支持を受けていたこの処刑方法を公然と支持する将校は前の司令官の唯一の遺産相続人であった。しかし、今では司令官の会議には出席させてもらえない。栄光の公用処刑は過去のものになってしまったと将校はいうのであった。

流刑地はヨーロッパとアジアの境界にあることがうかがえる。

将校が女持ちの綺麗なハンカチーフを二枚取り出すと軍服の襟に差し込んだ。
「その軍服はどう見ても熱帯向きには見えませんね」
とヨーロッパからの旅行者はいう。
将校は巨大なミシンのような針のついた機械でー「上官に従うべし」という文字を犯人に彫りこもうとしている。旅行者は裁判の手続きの説明が呑み込めない。「処刑されることは知っているのですか」
「知らないのです」と将校は応える。
「自分で自分の判決が分からないのですね」と旅行者が聞くと、
「そうです」と将校は答える。
字を刻むことによってことは進んでゆく。
この島に於いては被告が罪を認め罰を受けると判決が無いまま処刑される。話をきいていくと、将校はすでに亡くなっている前任の司令官の忠実な部下である。やがて、旅行者は正体をあらわす。謎めいた旅行者は本土に於いて新任の司令官から任を負った学者らしい。カフカの小説においては主人公は普遍的な私ではない。語り手が謎めいて現れ、やがて本賞を現したり、目の前で異貌に変態する。単なる私に見える主人公は私から彼に変わってゆく。つまり語り口は私小説風ではなく呪術風であり、呪いをかけて情景以上に登場人物が変化する。普通の旅行者ならば変化する周囲の風景を描写するところだろう。ところが、カフカの小説においては風景は変わらず主人公の移動は限られ閉じ込められている。読者は状況変化によって時間を感じるのではなく、主体変化によって時の流れを知ることになる。そのために読者はタイムトラベラーの時間を生きることになる。
主人公である旅行者は島での処刑の様子を黙って観察し、処刑の途中で自分の参考意見を述べたのである。

それは、アジア的な裁判抜きの処刑と拷問を過去のものとして葬るべきだという意見であった。すると将校は犯人を機械から下ろし、自分自身を処刑機械に繋いだ。この将校の変身ぶりには驚かされる。彼は専制君主の下僕からいきなり民主的正義漢に瞬間移動するのである。まるで東洋的専制制度から西欧的民主共和制度に呪縛を解かれた羊のように狼の着ぐるみを脱ぎ捨てるのである。

この将校の姿には第二次体戦敗戦後の日本人が重なって見える。今まで否定していた価値を肯定し、これまで肯定していた価値を否定する。ただし、日本人のように素知らぬ顔での無責任は許されない。もはや自己肯定できる存在ではないという自覚には気品がある。あたかも敗戦により切腹した将校には自己否定の潔さがあるように。
流刑地の将校は言葉によって自己処刑する。つまり自己判決を下すのである。流刑地の将校は言葉によって自己処刑する。つまり自己判決を下すのである。「汝公正なるべし」という言葉で自分を処刑しようとした。処刑機械で犯人を殺しかけていた将校は「釈放する！」と犯人に告げた。
「汝公正なるべし！」と革製の紙挟みの書類を旅行者に見せた。将校は機械の点検を済ませ、軍服を脱ぎ全裸になった。犯人に起こったことが、今度は将校に起こった。将校は処刑機械に自分自身をセットした。図書箱の中から歯車が居場所をなくして墜落して砂の中に突き刺さったまましばらく回転を続けた。歯車は暗箱の中でなめらかに回転していたのに図案を裸体に刻みはじめると次々に姿を現してておえない存在になってゆく。
機械は身体に字を刻みこむ機能を失い、拷問機から殺人機に変身して将校を刺し殺してしまう。結局世界は言葉に支配されている王国である。カフカの小説は全て自己判決のための作品にも見えてくる。
それまでは静かに回転していた暗箱の中から文字を組み込む歯車が姿をあらわして砂の中に落ち始めた。制度の機械の歯車として回転し続けている限り、自己判決はあり得ないのだが、機械から外れ落ちる時から個人が成立する。やがて、次々に大小の歯車が飛び出して、機械は完全に壊れてしまった。いったい世界の何が崩れ始めたのだろうか。
流刑の島はあたかもこの世とあの世、西と東の世界の境界に二つの考え方が二つの潮流のごとくいきちがった離島に見える。あるいは、潮流と本土の瀬戸際の象徴のごとくに存在している。処刑機械はその行き違いのままの潮流を縫い上げるかのように狂気そのものとして一人の人間を縫い上げようとしている。潮流には制度の大陸をも打ち崩す力が潜んでいるように思える。動かぬ風景の中で動くものは何なのか。おそらく動く潮流こそが時間を支配する。

それまでの将校はこの処刑機について説明し続け、旅行者は黙ってそれを聴いていた。この機械そのものが制度というものの道理を表しているにもかかわらず、機械式運動は、その道理には何の真実も存在しないかのごとく事の成り行きは時を刻んでゆく。
フランツ・カフカの小説は事の成り行きの中では善は悪に裁くものは裁かれる者へと簡単に変身してゆく。絶対的という静止世界の真実はことごとく崩れ流れ、その流れの時間にこそ真実があるとするフランツ・カフカの小説は事語りである。

処刑場から解放された犯人と一人の兵隊は人里の方向にやってきて人家のあるところにたどり着くとそこには洞窟のような喫茶店があり、中に入ると沖仲仕らしい客がいてテーブルの下には墓石がある。
それは処刑機械を推奨してきた前司令官の墓である。しかも、人々に踏まれては蹴飛ばされる位置にある。それはすでに墓の意味を失い島の心と本土の心の行き違う境界を象徴する記念碑に過ぎない。あるいは、すべての記念碑や墓は行き違いの境界に過ぎないのかもしれない。祈るものの視線と祈られるものの視線は決して交わることがない境界かもしれない。
人は単なる旅人であり続けることはできないのかもしれない。なんらかの使命を負った存在にならされているのかもしれない。
旅行者が島を立ち去ろうとする際、犯人と兵隊も一緒に飛び乗ろうとするが、旅人は二人を追い払おうとする。旅人の沈黙のままのこの行為は何を事語っているのだろうか。

兵隊と犯人を連れた緑雨者は離島を離れ人家のあるところにたどり着くとそこには洞窟のような喫茶店があり、中に入ると沖仲仕らしい客がいて、テーブルの下に墓石がある。
旅行者は束ねてあるずっしりとした綱を一本持ち上げるとそれで二人をおどしつけ、飛び乗ることを諦めさせた。
このけじめは一体何なのか。考えさせられるところである。

◆し月

安西佐有理

ひなげしも忽然と咲く百年目
リラをみて帰った日暮れ（そら言に）
「さようなら」そしてここから人工島

びすけっとをかじりながら
もういないひとや、（だれか）（わたしも）いなくなるときがちかづいていることをこうちゃといっしょにのみこもうとしていた。くさのはな、きのはながりれーしてさき、いのちみちるきせつだから、はるはざんこくなんだとおもっているわたしはまだいきていた。いまはるはただまぶしい。

◆小さな画家

高谷和幸

今日というところから
子午線の翳りが斜めに落ち
壁の高みから降りてきた
椋鳥が金網のフェンスに止まっている
わたしたちの前で
冷めた身体のつくろいをはじめる
わたしたちにあるあなたの残した切り面と
同じものが
あの鳥の小さな個にもあり
突き出した玲瓏なさわりに
あなたが死を迎えた季節が触れられていた
のどからの鋭い音吐には二音階あった
すぐに届くものと
滞在するものと
文字は意味を失い
あなたの
書記のもつれた
蔦のような表象が
指呼されて
壁にペインティングされる

◆トランジット

高谷和幸

人の命の多さに
見ることを迷うことがある
わたしと友人たちは駅の
いくつもの並んだ柱に沿って歩いていた
見えるものと
隠れたものとが交錯した
柱の向こう側の奥行に出会う
目が目に会いに行く
あの時は
あなたを見送ったあとだった
見る側の
その自分の
見られる側への乗りものを変える
柱の立つ世界に
複数の話声が聞こえて
わたしたちは
奥行から
盲目で、水平にあらわれる

◆むかわり

高谷和幸

むかし一眼だった頃の
記憶があるのはなぜだろう
真ん中の世界の
双曲線の外れたものに集中する
逃げるもの　二つが重なる目
あなたの線的な物語は
さかのぼり
家の柵からこぼれるような白さの
花がやはりここで咲いている
「人を迎えにいくところだよ」
太陽がある角度でとどまりつづける
わたしたちの
一歩から一歩へのあゆみが
思ったよりも
遅延していく
再会を果たせなかった道に
こぼれていたように

◆観測地点（藤野翔真くんへ）

大西隆志

樹々の間を歩いていると小枝や
小禽に姿をそわす光が見える
ゆっくりと変わっていく
粒子にはじける仕切りの糸
縛りつけるのは時間の崩壊を防ぐため
手の仕事は大事なんだ
ときどき指を傷つけながら
包装は完了する、色彩も括られ
野原も街もぐるぐると巻かれていく
観測の森にやってきて
柔らかな地面を踏むのは
一日のはじめの音楽のステップ
落葉から立ち昇ってくる匂いに
記憶のまるいものとして浮かび上がり
たくさんのカップ、花ひらく
どちらに行くのか
先を急ぐのは約束でしょうか
かげろうのあるかなしかの世の支度に
きみはコトバを差し出している
森の螺旋状の階梯は
街に続いているようだ
聞こえてくるもの
窓辺から鉄橋を眺め
郵便配達人が一両電車と擦れ違った
川向こうの駅に
手紙が届き、川面に光が落ちて
雑誌を切り抜いて
河原に流れ着いた遺棄物は、よみがえっていく
コトバは色彩をまとい、形を獲得し
坂を下ってきて、定点観測は
きみを驚かせる

◆てるみ

中堂けいこ

ミルクが唇からながれこみ
咽喉をおちていく
五臓の壁から六腑にしみるまで
わたしは走らねばならない
白い液体がやがて血肉にゆきわたり
あなたの指先を温めるときまで
光がほんのり爪さきにともるとき
わたしにいう
藤棚の下のあなたを覚えていると
わたしたちは同じ月と陽をめぐっているのだった
走りつづけるあなたの背中から
わたしの視線が白い顔をした
ミルクのしずくになって
おちていくのだと

◆三つの影切り

高木敏克

◇御影

日が暮れると多くの影法師が立ち上がり海岸通りからゆったりとした丘を上りはじめる。声とともに影法師が立ち上がるのが見えたのだ。
地面に向かって白い光線が突き刺さり盲人の杖が見えたので道をあけたらその顔は闇の塊だった。闇はうめき声とともに振り返りわたしの声を待つ。
「何をしているのですか?」と尋ねると
「見ればわかるだろう。地下水脈の調査に決まっている。ほら、こうやると水脈が青く浮き上がるのがわかるだろう」
この乱暴な口の利き方を僕はどこかで聞いたことがある。
「私には見えませんが」
「それはそうだな。この光は闇の中でしか見えないはず。水脈調査は夜の仕事なのだ」
「ええ?まだ夜にはなっていませんよ」
「あはは、俺達には夜も昼もない。いつでも闇の中で地下水脈を見通せるのさ」
「つまり、地面も海面もない闇の世界にお住まいなのですか」
「俺たちは単なる盲人ではない。闇の中ではちゃんと見えているよ」
「すると、地面の下も見えるのですね」
「まあ、そうだな。地面の下を泳ぐ魚みたいなものさ」
「なるほど、今は地下から地上に出たところなのですね」
そういう訳で、影法師は立ち上がったらしい。

◇月見山

あれは山陽電鉄の月見山駅の近くの親戚の家を家族で尋ねた時のことだった。
僕は坂道を自転車で下っていった。山陽電鉄の踏切を渡り切ったところで急ブレーキをかけると自転車がよろめいて背中に張り付いていた影法師が下に落ちた。
「大丈夫か?」
影法師は立ち上がると照れくさそうに足元の土をはたいてから少し遅れながら僕の後をついてきた。もう親戚の家の近くだからもう待たなくても迷子にはならないだろう。それに姉さんも後から自転車でやってくることだし。振り向いて影法師を見つめたがその表情は読み取れなかった。顔が闇に塊でできていて輪郭があるだけだった。ただ、表情の代わりに小さな光の粒が真っ暗な顔の中にあり、夜空に引き込まれるおももちだった。
僕は自分の影法師を置き去りにすることを絶えずもくろんでいた。その時も影法師をおいて親戚の家に一目散で自転車を走らせた。影法師はやってくる姉を探して踏切をとぼとぼと歩いて引き返したらしい。あきらかに人まちがいだ。
姉はすでに親戚の家でアイスクリームを食べていたのだから。それ以来、僕の影法師は消えてなくなった。影のない自分がどれだけ寂しいものか誰にもわからないだろう。見上げると、夕刻の空は半分明るく半分暗く、取り残された半月が地上から浮き上がった影を足元まで吸い込もうとしていた。

◇岩谷峠

そこを通る時、どうしても意識の切れる場所がある。
下ることはできるが上ることのできない岩谷峠の激坂だ。
岩山と岩山の間が鋭く切れ込んだ谷となり、道路はトンネルを過ぎると空中の橋となり、すぐにまたトンネルに入る。そこでは空間が途切れるのではなく時間が途切れるのだ。
トンネルを出た瞬間に橋の上から下の景色を見ようとするのだが、はたして谷底に川が流れているのかどうなのか見えたことがない。
僕はただあいつの影法師を追っていて、遠くに石積のダムが見えた気がする。
自転車が高速で通り過ぎようとすると、そこは危険な場所で、谷底から強風が吹きあがり、何も受け取らずに様々な慰みの記憶の花束をまき散らす。
そこはまた、何度も言われてきたように時間の切断される場所であり、大空が青い切断面になって見えるのだから、だから言っただろう。
その日も時間はすっぱりと縦に切断されて、過去と未来が風に舞い上がっていた。切られた首から血が吹きあがり、時間がのたうちまわって天空に吸い込まれているのだ。
その瞬間、僕の影法師は慌てて背中から飛び降りてガードレールに駆け寄ったが時間は止まっているのに血が止まらない。谷底に血の雨が降り、モンシロチョウが竜巻になって舞い上がり、二度とそこには戻らない。

◆いや　暗いなあ

木澤 豊

X形のアーチに　暗い中庭と言っても
そこから　空に浮く階段があって
ほれ　いなかにも都会にもあるやつだ
ほんでな　そこから見えるのは
いや
見るのは　さ

わたしは　見知らぬ　場所でしか
落ち着けない
なぜか
うん　選択でなく　同感なんだよ

とんとん
私に合う窪地で
トントントンカラリンと
眠くなる
影のかたちをとって

ねねむ　右足で土をかく
ねねむって　だれですか
訊かれりゃ　断れまいで
な

やさしさの　うながしを
なんて

中手店の路地から
火の玉が走ったという噂だった

屋上から富士山が見える
そんな日は　黒々空染める爆撃機から
雨が降る
火の　ね

いまになって　後悔するよ
や
航海するよ

おれを　おれが選ぶんじゃなかった
なあ

神戸詞（うた）あしび

121-2018.04.22 大橋愛由等

仏教とキリスト教をめぐって考えたことなど

▼三月一八日（日）＝兵庫県現代詩協会の「文学紀行」に参加する。ことしは近場にしようと、神戸市内の須磨寺周辺が選ばれた。この須磨寺は、境内に多くの詩碑、句碑、歌碑があり、古くから文学者によって愛されてきた場所である。境内では信者たちが寺から札を買って願いごとを書き込み、僧がその札に対して読経して呪術的な付加価値を付けるといった光景もみられ、その光景をわたしは外国人観光客とともにしばらく見つめていた。まさに日本人の民間信仰の現場である。また廃仏毀釈でなくなったはずの神道系祠も新設されたり、座禅に該当する「阿字観」の道場もあり、日本人の宗教に対するごった煮感覚を体現したようなワンダーランドになっている。

そこでふと思ったのは、日本人が作り出した本地垂迹説はかの廃仏毀釈でまったく潰えてしまったのだろうか、ということ。明治初期に神道を国教化しようと画策する動きが津和野神道グループを中心に展開された。この画策に刺激されて、寺院から神道系施設、神社から仏教的事物が排除されていくことになる。いわば宗教の純化運動である。この運動は仏教側からの反発や、神道そのものがキリスト教と拮抗しうる体系的な教理を持っていなかったために、頓挫することになる。しかし、日本人によって作り出した〝権現〟という媒介者（あるいは神）はどこにいったのだろうとずっと疑問に思っている。形を変えて権現たちは生き残っているのだろうか。

〈2018.3.18 文学紀行として神戸市・須磨寺を兵庫県現代詩協会の人たち。当日は天候にも恵まれ心地よい散策が出来た。

▼四月八日（日）＝われらが友・元（はじめ）正章牧師が、赴任地である島根県益田市の益田教会において結婚式を挙げた。花婿七一歳、花嫁六九歳。ともに伴侶を病気で失っており再婚同士である。元牧師が所属する日本基督教団には七〇歳の定年制度がある。この制度によって元牧師は西宮市の教会を辞めその後は「林住期」と定めて日本全国を放浪する予定でいたのだが、関係者に請われて益田教会に赴任することになった。定年制度はあるものの緩やかな規制と思われ、条件がそろえば何歳になっても牧師を続けることができるということである。

元牧師は益田に赴任するにあたり、この地で骨を埋める覚悟をしたようだ。もともと神戸っ子としての自覚がある元氏で、益田とは縁がなかったのだが、その覚悟は芯が通っているといえよう。

この益田は信者数が少ないらしく、しかもいずれの教会もそうだが信者の高齢化が進んでいる。それでも日曜日にはかならず礼拝をおこない説教をしなければならない。この説教のためにすべての牧師は絶対的なテキストである聖書を読み込み、その中から必ず一節を引用して信者に語ることになる。このため牧師（そして神父も）という職業は読書をすることが日常の中の大切な営為なのである。特にプロテスタントは聖書というエクリチュール中心主義の立場なので、書物（聖書）がある意味で物神化していると言えるだろう。

元牧師は益田教会に赴任してから「益田っこ通信」というハガキによる情報発信を始めた。インターネットが普及している現在にあってもネット環境と縁がない高齢者もいるために官製はがきによる便りを発信している（わたしのもとにはメールで通信が送られてくる）。こうした地道な努力（布教活動）がいずれ新しい信者の登場となっていくことをわたしなりに期待しているのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.132
神戸

2018年04月22日　通巻132号★
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)